Osaka University Knowledge Archive

Title	＜書評＞Tine Rostgaard, John Parsons and Hanne Tuntland (eds.), 『Reablement in Long-Term Care for Older People』Bristol University Press, 2023年, 248頁, GBP 80.00.
Author(s)	久保田, 怜
Citation	未来共創. 2024, 11, p. 244-247
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97819
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

書評

Tine Rostgaard, John Parsons and Hanne Tuntland (eds.),

『Reablement in Long-Term Care for Older People』

Bristol University Press, 2023年, 248頁, GBP 80.00.

久保田 怜

高齢化の進行による介護財源の縮小や人材不足は、日本のみならず世界各国が直面している課題である。その解決策のひとつとして関心を集めているのが、本書が取り上げる「リエイブルメント」（Reablement）の取り組みである。「リエイブルメント」とは、「個人を中心に置いた包括的なアプローチであり、身体機能やその他の機能を強化し、日常生活における自立度を維持、向上させ、長期的な介護サービスの必要性を減らすことを目的としている」（本書：7）。具体的には、自宅生活で何らかの困りごとを抱く高齢者に対し、自立生活の継続を目標に、短期間（4~6週間）に集中して専門職チーム（介護士や作業療法士（OT）や理学療法士(PT）など）から機能回復などのサービスが提供される。つまり、リハビリテーションの介入方法のひとつとも捉えることができる（本書:5)。比較的新しいアプローチであり、そのモデルや効果に関する研究は乏しい（本書：3)。その上で、本書はそもそも「リエイブルメント」とは何か、どのような影響があるかを、国際比較を交えつつ理論的かつ実践的な面から探索した一冊である。本書は複数の著者による論文集で、執筆者の研究領域は、社会政策や社会福祉、公衆衛生分野など多岐にわたる。また、国際的な視点を取り入れ、デンマークやスウェーデン、ニュージーランド、イギリスなどからの研究が含まれている。さらに、実際にOTとしてリエイブルメントの実践に関わってきた研究者が含まれていることも本書の特徴である。

本書は4つのパートに分かれており、全11章から構成されている。以下では各章について要約する。まず第1部（第1～4章）は理論面や各国での実践内容について概観している。第1章では、本書が学際的かつ国際的な研究であることが示され、背景やその意義について述べられている。第2章では7カ国(イギリス、オーストラリア、ニュージーランド、デンマーク、ノルウェー、スウェーデン、オランダ）において、リエイブルメントがいつ、どのような用語と共に導入されてきたかを整理している。そして各国の特徴を踏まえたリエイブルメントの構成要素がまとめられている。それらは、①高齢者本人主体であること、②自宅で生活している高齢者を対象とすること、③実際に住んでいる環境で、実際の暮らしの中で行われること、④高齢者それぞれに合わせた目標を設定すること（高齢者は日常生活の中で何を重視するのかに意識を

大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程；rei4595@gmail.com

すること）、⑤目標への統合的なアプローチを図ること（日常生活動作の向上だけでなく社会的ニーズなどの様々な面を考慮すること）、⑥多様な介入アプローチを図ること、⑦短期集中的な介入であること、⑧学際的アプローチ（福祉や医療を越えたアプローチ）であること、⑨定期的な評価を行うこと、⑩定期的に職員研修を実施することである。例えば、高齢者が自宅で料理をし続けたいと望むのであれば、実際の自宅キッチンで、専門職から機能訓練や調理方法などのサポートを受けつつ、目標の実現を図っていく。つまり、リエイブルメントは病院で提供されるリハビリテーションとは異なり、高齢者の意向に合わせて、実際に住んでいる場所でアプローチが展開される。そして、第 3 章では、リエイブルメントの概念がどのように各国に波及していったのかに注目し、専門家へのインタビューと国際機関や各国の報告書を基に整理している。1990 年代半ばに OECD や WHO において「Active and healthy ageing」が提唱され、この考えが高齢化と持続可能なサービスへの懸念と結びついた。そして、1990 年代後半にかけて各国で様々な用語が用いられながら活動が展開されていく。例えば北欧諸国の「家での / 日常生活におけるリハビリテーション」（home rehabilitation / everyday rehabilitation）、オーストラリア周辺の「回復ケア」（restorative care）などである。また、多くの国が自治体レベルの取り組みから全国レベルに拡充していくボトムアップの流れをとっていた。最終的に、各国のプロセスは今後の研究発展を目指し「リエイブルメント」として統一されるようになった。続く第 4 章は、実際に、各国の在宅ケアにどの程度リエイブルメント実践が取り入れられているかを整理している。多職種との連携の度合いや職員研修は国によって異なっていることが分かる。以上をまとめると、第 1 部では、リエイブルメントの根底にあるアイデアや、各国の実践の多様さと共通項を理解することができる。

第 2 部（第 5 ～ 7 章）は効果について論じられている。第 5、6 章では、リエイブルメントの効果が介護財源の支出抑制と強く結びついて議論される中で、利用者である高齢者への影響に注目している。さらに、これまでの関連研究を検討した結果、先行研究では身体機能の向上や高齢者の自信の創出が示されているが、これらの研究で使用された調査方法や分析手法には一貫性が欠如していると指摘している。対照的に、第 7 章では、従来注目されてきた費用対効果に焦点を

当て、医療経済学の視点からリエイブルメントについて議論している。第2部ではリエイブルメントの議論が発展途上であり、より確かな結果を蓄積するための良質な研究方法の検討が不可欠であることを提起している。

第3部（第8・9章）では実践面に注目している。第8章では、これまでリエイブルメント実践の対象外とみなされていた認知症高齢者に対するアプローチに焦点を当てている。各国の認知症高齢者への実践事例を紹介し、その効果や課題について論じている。認知症を発症すると、全く何もできなくなるわけではなく、高齢者の潜在能力に注目し、エンパワメントすることで、リエイブルメントの実践が可能となるとした。一方で認知症の気づきは遅れる傾向があり、適切な時期に介入することの困難さを指摘している。第9章では、2015年にリエイブルメントを制度化したデンマークで実施されたケアワーカー（ホームヘルパー）への質的・量的調査からリエイブルメントの実践が彼らにもたらす影響を論じている。リエイブルメントは、短期間であるからこそ高齢者と密な関係を築くことができ、また高齢者の声を聴き、ニーズに合わせて柔軟に支援をすることが求められる。そのため、これまでのホームヘルプと比較すると、より専門的な知識が必要になり、ホームヘルパーのやりがいの度合いが大きく異なる。つまり、リエイブルメントは高齢者本人だけではなく、ケアワーカーにも影響をもたらし、彼らにやりがいを与え、離職の予防につながりうるという可能性を示唆している。

第4部（第10・11章）ではこれまでの議論を踏まえ、不十分な点と今後の展望が描かれている。リエイブルメントはリハビリテーションとの兼ね合いから、身体機能の維持、向上が注力される傾向がある。しかし構成要素⑤にあるように、他者や地域との交流などの社会的な側面にも目を向けながらアプローチが展開される必要があり、この点が見落とされやすい。そしてその根底には高齢者本人を中心に置いた、パーソンセンタードな視点が不可欠である。これらを踏まえた今後の実践および研究領域での発展を期待し、締めくくられている。

以下では、第3部の内容を参照しながら、日本におけるリエイブルメントの現状を検討したい。日本では「リエイブルメント」という語の使用は多くはないものの、2015年の介護保険制度改正により導入された「介護予防・日常生活支援総合事業」の「短期集中型サービス」と関連づけて議論される。そのため日本は

政府主導のトップダウン型のリエイブルメントと言える。ただし本書にある通り、リエイブルメントは徹底した個別ケアに基づいており、目標設定や高度な専門的知識、OT や PT をはじめとする多職種連携が不可欠である。リエイブルメントを制度化しているデンマークでさえ、対象となる高齢者のモチベーションの程度は様々であることから、アプローチは専門職個人の力量に委ねられている部分が大きい（本書：197）。つまり、リエイブルメントは専門職の働きがいにつながる一方で負担感を強いる可能性も秘めている。日本の場合、単に介護サービスの種類を増やし、その役割がケアマネジャーなど特定の職種に集中し、「やらされている」状態である限り、高齢者の生活の質の向上という本来の効果は期待できない。

その上で、本書はリエイブルメントにはどのような視点が重要かを理論的かつ実践的に読み解くことができる良書である。「リエイブルメント」という言葉だけが独り歩きしないよう、よりよいケアを模索する介護従事者や、今後の介護政策を検討する政策立案者や研究者に一読を勧めたい。